

会誌編集委員会 女子部

Number
36

女子部の役割

東京女子大学 加藤由花

コラム「会誌編集委員会女子部」は今月号でNo.36になりました。連載開始から約3年が経ち、当初6名だった執筆者は、現在11名まで増えています。そもそもは3年前の4月、一気に女性編集委員数が増えたことがきっかけでした。塚本編集長の発案でコーナーが始まり、担当理事の私がとりまとめを行うことになりました。そうこうしているうちに、少しずつ担当してくれる人が増え、ぜひ書きますと言ってくれる人が出現し、こんな記事を書いてくださいという依頼を受け、女子部コラム読んでますよと声をかけられることもあり、ふと気が付くと3年が過ぎていました。

読者モニタから「女性に注力する意義が感じられない」など、厳しい意見をいただくことも多々あるのですが、何度か言及しているように、まだまだマイノリティである女性会員のビジビリティを高め、さまざまな立場からの意見発表の場を提供する意義は大きいと感じています。コラム執筆は有志によるものなので、もちろん執筆に参加していない女性委員もいます。執筆しないことを選択できることも大切です。

さて、コラムの連載が始まったタイミングで女子大学に勤務するようになった私は、環境の変化により、あることに気付くようになりました。それは、明示的に意識してはいなかったものの、それまで、マイノリティ（女性）としてある種の居心地の悪さを感じ

ながら仕事をしてきたということです。研究室の学生は、ほとんど男子学生だったのが、女子学生だけになりました。女性教員の割合も格段に増え、事務職員にいたっては大多数が女性です。このような環境で過ごすうちに、マジョリティであることの居心地の良さに気づき、その裏返しとして、それまで何とはなしに感じてきた居心地の悪さを再発見することになったのです。さらに、マイノリティでありながら、マジョリティ側に過度に適応することで、私はその集団内で生き延びてきた（という表現が適切かは分かりませんが）のだろうということにも気付かされました。女子大学の男性教員たちは、実に見事に女子学生の集団に適応しています。過剰適応のようにも見えます（もちろんそうでない例もたくさんありますが）。そして、それは、マイノリティとして集団の論理に過度に適応してきた私自身の姿を映しているようにも見えました。

女子部のメンバは多彩で、自由です。本コラムでも、一人ひとりが主体的に、さまざまな視点から率直に意見を述べています。これらの姿勢は、私が再発見した居心地の悪さを打破してくれる原動力になるだろうことを期待させ、私を大いに勇気付けました。本コラムが、そんな風にだれかを勇気付けながら、これからも回を重ねていけることを願っています。

詳しくは <http://www.ipsj.or.jp/> をご覧ください

ITに関する最新情報や研究発表の場の提供を通じて、あなたのお役に立ちます。

会員募集中!!



申込/照会先 一般社団法人 情報処理学会

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F

Tel(03)3518-8370(会員サービス部門) E-mail: mem@ipsj.or.jp

